

飲兵衛のひとりごと

生産病研究チーム長



高橋 秀之

TAKAHASHI, Hideyuki

子供の頃、家のお墓の墓石に刻まれている先祖代々の戒名の中に、変わった戒名があるのに気付いた。その先祖は、江戸末期の嘉永4年に没していて、戒名が「壺中酒満雄男」であった。その後大学生になって、実家でひどい2日酔いで苦しんで寝ている時、母が心配そうな顔をしながら、その先祖にまつわる話を持ち出した。母によると、その先祖は、やはり無類の酒好きだったようで、最後は酒壺の最後の一滴を飲み干した後、大往生したと言いつた。また、人が良くて面倒見の良い、親分肌のお先祖だったそうでもある。それもあって、家族は金銭的にも大変苦労したらしい。母は最後にこう締めくくった。「この戒名でもわかるとおり、私らの家系は酒に因縁のある家系だから、酒にはくれぐれも注意しなさい。」

母の心配をよそに、20歳から今に至るまで、酒とはかなり縁の深い生活を続けてしまった。今でも、過去の飲酒に伴う恥かしい失敗の数々が頭をよぎる。また、2日酔い、3日酔いで、アブラ汗とともに血の混じった胆汁液を吐き続けたことが何度あったことか。しかし、自分の酒飲み人生を悔いているかという、決してそうではない。酒にまつわるデメリットを遙かに上回るメリットを沢山得ているからである。まず、昼間の生活で溜まったフラストレーションを夕方一杯の酒でどれほど解消できたことか。現在まで心身共に元気でいられるのは、この一杯の酒の力が大きいと信じている。また、お酒を通して、腹を割って話せる友にどれだけ多く巡り会えたことか。

「友、遠方より来たる。また楽しからずや」で、懐かしい人間と再会し、酒を酌み交わす時ほど人生の喜びを感じる時はない。例えば、職場の年間行事の中で心待ちしている1つに、毎年秋、4日間かけて行われる「家畜衛生部門別研修会」がある。前年度までに7ヶ月間の長期研修を受けた都道府県家畜保健衛生所の職員の方々が中心で、「やあやあ、お久しぶりでした」と懐かしい面々が全国から集まって来る。昼の部の事例報告会や各種技術講習を終え、夜の宴が始まる。各々好みのアルコールをいただき、

お酒の飲めない人はウーロン茶で、全国各地のお土産をつまんだり、焼き肉や鍋をつついたりしながら、心ゆくまで語らいを楽しむ。そして、その輪の中にいて無上の喜びをしみじみ感じる。なぜ、心の底から喜びを感じられるのか？ それは、ほろ酔いも手伝ってお互いの絆（かみしも）が取り払われ、組織の上下関係を忘れ、年齢の差を忘れ、人と人の心の琴線に触れるといった人間の根源的な喜びを感じられるからではなかろうか。

「酒は百薬の長」といわれる一方で、酒にまつわる否定的な言葉も多い。確かに、飲酒による悪質な交通違反やむごたらしい事件も後を絶たない。そして、酒を飲むことが何か悪いことのような社会風潮が一部にできあがりつつある。しかし、酒の効用そのままで否定することは出来ないと思う。酒を飲むにあたって、社会人としてのルールをキチンと守り、また各人の限界量を忘れない限り、やはり、「酒は人間社会の潤滑油であり、百薬の長」であることに間違いはないと思う。

最近、物質的な豊かさとは裏腹に、心の絆、心の和といったものが日本の社会や組織からドンドン失われつつあることを痛感している。我々の職場も、残念ながらその例外ではないように思う。これには、この数年来の組織の大改編といった激動に翻弄され、お互いが心の余裕を保てなくなっていることも原因の1つとしてあげられると思う。いずれにしても、このような組織のきしみ、人と人の間のきしみにあえぐ今こそ、人の和を広げる呼び水として、また潤滑油として、酒の効用を何とか役立てられないものか、と真面目に願う今日この頃である。

ところで、現在91歳の母は、8人の息子と娘を産み、育てたとは思えない位元気で、毎晩1~2合の晩酌を楽しむ日々を送っている。私も年に数回は実家に帰って母の晩酌のお相手をするが、それがせめてもの親孝行になるのかなと考えている。そして、90歳を越えた母とその息子が共に元気で酒を酌み交わせる幸せに対し、ご先祖様とバッカスの神様に心から感謝したい気持ちになる。